

文化生活の基盤のもろさ

おい夫婦の住むマンションが、リフォームの時期が来たというので、二ヶ月の間、別のマンションに仮住まいをしていた。そこがビルの間のマンションで、全館エアコンはいいのだが、窓は開けられず空も見えないところだったそうだ。まあ、わずかの間だからと我慢をして、さてリフォームのできた自分の住まいに戻って、ほっとして私のところに報告に来た。全面的なリフォームだったので、基本的な設備はパックされた最新式のものがとりつけられていたという。

おいが言うには、便利なのはいいのだが、なんだか心配なこともある、とのこと。

「たとえばトイレだけど、そばにいけば自然にふたがあいて、温水洗浄便座はいつも適温、そして人が立ち上がれば水が流れるようになっているんだよ。今度、見に来てよ」

おいの心配とは、こういうことに慣れてしまうと、よそへ行ったとき、水を流すことを忘れてしまうのではないかというのだ。

「それって、ますます人間を無精にして頭を使わなくさせる道具じゃないの」

私は言った。たまたま東京では、落雷で停電し電車が止まって大騒ぎしたり、送電線にクレーン線がぶつかり、二、三本の線を傷めたことで東京や横浜など広い範囲で停電、電車は何時間も止まったという事件のあった直後であった。もちろん、エレベーターに閉じ込められた人もいたし、信号も止まり、テレビが見られないとかんしゃくを起こした老人もいたという。

たつた二、三本の送電線の事故が、全自動洗濯機ならぬ全自動トイレさえ

も使えなくするだろう文化生活のもろさを、私達はいつも考えておかなければならないのだと考えた。(六六三字)

吉沢久子 新潟日報二〇〇六年八月二六日付朝刊より